法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-27

「身を棄つる」浮舟の物語

アマノ，キヨコ / 天野，紀代子

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
64
(開始ページ / Start Page)
2
(終了ページ / End Page)
12
(発行年 / Year)
2001-07-14
(URL)
https://doi.org/10.15002/00020168

〈論文〉

「身を棄つる」浮舟の物語

天野紀代子

『源氏物語』の最後のヒロインは、なぜ無個性に見える浮舟なのか。第一部、第二部で紫上の苦悩と精神的自立を描きこみ、第三部では強靱な自意識をもつ女性、大君を描ききった後で、敢えて作者は受動的に流される浮舟を造型するのだ。

フェミニズム批評が、主体性のない夕顔や浮舟のような女性を「痴れ者」[注一]として糾弾するのは当らない。少女の頃の『更級日記』の作者が、他でもない夕顔や浮舟にこそ自己投入して耽読していたことを見れば、出身階層からの共感ということもあろうが、その薄幸な生涯や自ら死を選ぶ人生に感動したに違いないことが知られる。

皇族の流れを汲む女性が自ら入水する物語、それが作者の構えた最後の大一番なのだ。死を願った大君には、それを遂行させ得なかった作者の、新たな挑戦と受けとめることができる。

そもそも『源氏物語』において、身を捨てるほどの恋は誰のものだったのか。「身を捨つ」とか「身を投ぐ」という語は、どのように使われて浮舟にまで至るのか。単なる誇張表現以上の、自ら命を断つということに、当時の人々はどれだけのリアリティーをもって口にしていたのか。或いは仏教でいう「捨身」は視野に入っていなかったのか。それらを考えつつ、浮舟を入水に導く方法とその表現の特質を見定めることを、本稿のテーマとする。

それは、浮舟蘇生以後を重視するのではなく、入水に至るドラマ性にこそ『源氏物語』の達成を認める読みの提示ともなろう。「蜻蛉」の巻以降に差し出される「救済」のテーマには踏み込まない。それは答えの出ない問いかけとして残されたままだし、物語は「浮舟」の巻の緊迫感に最後の頂きをもったと考えるからだ。

一、「身を投ぐ」譬え

光源氏の恋は命をかけたものだったのか。夕顔に突然死なれた夜、亡骸を傍らに恐怖の中で思うのは、「命をかけて何の契

りにかかる目を見るらむ」という、身の危険にさらされたことへの自嘲ぎみな嘆きだ。若き日のアバンチュールは、所詮「隠ろへごと」の世界のものだった。メインテーマとなる帝の妃を過つ「おほけなくあるまじき」恋も、不義の皇子が帝位に即き、実父である源氏が上皇に準ずる位にまで登りつめるという、結局身を滅ぼすどころか栄達に繋がる構造になっているのが『源氏物語』である。

ただ朱雀帝の尚侍、朧月夜との一件だけは須磨退居を余儀なくされたのでもあり、命がけであったと、後から振り返られている。初老になった源氏が、女三宮降嫁によって齎らされた息づまる状況から一時逃避するかのように、朧月夜との仲を再燃させた件りである。

沈みしも忘れぬものをこりずまに身をなげつべき宿のふち波（「若菜下」④－84）*

あなたゆえに逆境に沈んだことを忘れはしないのに、また性こりもなく身を投げてしまいそうなこの家のふちです、と藤の花に添えて贈られてきた歌に、朧月夜は今さら命がけの恋もないものだと取りあわない。身を投ぐという比喩が空しく響いている。

淵に身を投げるというのは、大げさな誇張表現として屢々使われる。六条院春の町で船楽が催された時、玉鬘に心寄せる蛍兵部卿宮は、光源氏と次のような贈答をしている。

むらさきのゆゑに心をしめたればふちに身なげん名やはをしけき

ふちに身を投げつべしやとこの春は花のあたりを立ちさらで見よ（「胡蝶」③－170）

すっかり心を奪われてしまったので、この淵に身投げしたと噂されても悔いはない、と申し出る兵部卿宮に対して、源氏は身投げなど出来るものかと、戯れのやりとりをしている。

恋の苦しみからの脱却を、「死なましものを」と歌ったのは万葉の歌人たちだった。古今時代も、つれない人の心を見るのと身を投げるのでは「いづれまされり」と問答した歌がある（「忠岑集」112躬恒、113忠岑）。逢えるのなら身を滅ぼしてもいいという表現に、「身を投ぐ」という語が加わってきている。しかし身投げはあくまでも言葉の上での仮定であり、それを和歌に持ち込むのは例外的なことであった。

世の中の憂きたびごとに身を投げば深き谷こそあさくなりなめ（『古今和歌集』一〇六一）

世の憂さを感じる度ごとに身を投げていたら、深い谷も浅くなってしまうだろうよと皮肉った歌である。一度身投げしたら二度目はないのに、何度でも投身すると言っているところに可笑しみがある。深刻な事態ではなく、少々おどけた誹諧歌なのだ。すぐ厭世を口にする風潮への諷刺と読むこともできよう。『後撰和歌集』の次の歌なども、可笑しみを伴う。「恋」では

なく「冬」に収められている。

涙河身投ぐ許の淵はあれど氷とけねばゆく方もなし（494）

私の涙でできた川は身投げできるほど深いが、氷の解けない今は飛び込むわけにはいかないというのだ。身を投げたいのは相手の心が解けないからでもあるが、この先どこへ流れてゆけばよいのか方途がないという訴えである。和歌の上では、たとえ深い谷や淵に身を投げると歌われても、それは言葉上の誇張であり比喩であって、口承文芸の入水譚がもっているような現実感を伴わない。もっとも京の貴族にとっては、伝承の入水話も「昔」の「人の国」のこととして受容する遠い現実である。

光源氏の物語においては、「身を棄つ」とか「身を投ぐ」という語が最大級の献身や懸命さを表わす以上に使われる場合であっても、ここに見てきたような軽い和歌的常套句の範囲を出るものではなかった。しかし具体的に投身が連想される場合が、唯一、須磨・明石流離の際にある。

かしこき御影に別れたてまつりにしこなた、さまざま悲しきことのみ多くはべれば、今はこの渚に身をや棄てはべりなまし（「明石」②—229）

夢に現われた桐壺院に対して、源氏はいっそこの渚に身を棄ててしまいたいと訴えている。海辺で暴風雨に遭遇したことが、入水を現実化しているのだ。それと対応するように、明石の海岸で育った明石の君にとっても、入水は比喩ではない。常々明石入道から、志遂げられない時は「海に入りね」と諭されていたという噂は、源氏の耳にも入っていた（「若紫」①—204）。源氏の訪問が途絶えた時、明石の君は、

今ぞまことに身も投げつべき心地する（②—260）

と嘆いている。身の程を思えば当然の苦しみである。物語が海辺に導かれた時、入水はリアリティーのある語となっている。しかし作者は明石の君を都へ移し、栄華へのルートに乗せるのであって、入水伝説はここには呼び寄せられない。

明石の君の産んだ姫君が入内・立后したこともあり、無上の栄華を達成した源氏の晩年に、明石の君と昔を回想する場面がある。

身のいたづらにはふれぬべかりしころほひなど、とざまかうざまに思ひめぐらししに、命をもみづから棄てつべく、野山の末にはふらかさんにことなる障りあるまじくなむ思ひなりしを、（「幻」④—533）

流離の時代を共有している明石の君相手なので、少し大げさな回想に浸っている。あの頃は自らすすんで命を棄てる覚悟だったと。野山の果てに屍をさらすことになろうともというのは、身命を顧みない捨て身の行をおこなう修行者に通じる心境を重ねたのであって、海に身を投げるイメージではない。しかし光源氏の人生にとって、あの流離時代だけは身を棄てることと隣り合せだったとの自己認識を読むことはできよう。人生を全うした最晩年、出家が日程にのぼってきた頃の回顧としてである。

「身を捨つる」恋は、光源氏の次の世代に体現させられる。

源氏の妻女三の宮と通じ、身を滅ぼした柏木である。長い恋慕の末、ついに会えた女三の宮に皇女の威圧感はなく、物やわらかな可憐さに、柏木の自制心が崩れる。

さかしく思ひしづむる心も失せて、いづちもいづちも率て隠したてまつりて、わが身も世に経るさまならず、跡絶えてやみなばやとまで思ひ乱れぬ。（「若菜下」④—226）

どこへなりと連れ去りたい、それで一生を棒に振ってもよい、と刹那の判断が堰を越えさせる。しかし盗み出して逃亡することの困難を前に、女三の宮に訴えるのは次のような言葉である。

さらば不用なめり、身をいたづらにやはなしはてぬ。いと棄てがたきによりてこそ、かくまでもはべれ、今宵に限りはべりなむもいみじくなむ。つゆにても御心ゆるしたまふさまならば、それにかへつるにても棄てはべりなまし。（④—227）

もう身の破滅しかないのか。今まではあなたゆえに捨てがたい命と思ってきたが、それも今宵限りと思うと悲しい。僅かでも情けをかけてくれたら、それと引き替えに命を棄てもしましょう。後悔はない。

歌言葉で、涙川や深い淵に身を投げるなどとは口にしてこなかった柏木の死の覚悟は、このようにキッパリと話し言葉に移しとられている。それは、比喩でも誇張でもない実人生として開示された、柏木の身の処し方である。柏木の死は、源氏との確執から取りつかれた死病による自己清算という形で表わされた。

一方決して身を滅ぼしたりはしない夕霧などが、軽い口説き文句に「身を投ぐ」を使っている。中年になって、落葉宮に言い寄る場面である。「思ふにかなはぬ時、身を投ぐる」例もあるそうだから、私の気持を「深き淵になずらへ」て身を投じてほしい、などと申し出ている（「夕霧」④—479）。先きに引いた古今歌「世の中の憂きたびごとに身を投げば深き谷こそ浅くなりなめ」や、「身を捨てて深き淵にも入りぬべし底の心の知らまほしさに」（源道済。『後拾遺集』647）から言葉だけを借用している。淵のように深い私の心に、身を投げるつもりで飛び込んでほしいとの譬えである。

「身を棄つ」も「身を投ぐ」も、命を賭すような重い言葉としてではなく、強く迫る時などに軽く使うのが一般貴族の言語感覚だったのであろう。『源氏物語』第一、二部でのこうした使われ方が、その限りでは、宇治十帖の男主人公たちにも踏襲されていく。浮舟を入水に追い込む、薫や匂宮の側から検証してみたい。

二、「捨身」の思想

柏木の破滅的な情熱は、実子である薫には継承されず、ある部分匂宮に受け継がれている。宮中での禁足を破り無理を押して宇治に現われた匂宮は、「身を棄てて」来たと中君に恩を売っ

ている（「総角」⑤－281）し、雪を冒して弔問に訪れた際には、「今日は御身を棄てて」留まる（⑤－336）とある。捨て身の行動は、中君の心を打つものとして造型されている。

あと先き周囲も考える薫には、捨て身ということがない。大君の部屋に忍び入り、逃げられた時など、「今宵なむまことに恥づかしく、身も投げつべき心地する」（⑤－256）と、弁に訴えている。あまりの恥しさに身投げでもしてしまいたい気持だというのだ。この言葉は「頼めくる君しつらくは四方の海に身も投げつべき心地こそすれ」（「馬内侍集」9）を引歌としている。恋の苦しみの類型的表現が、薫の場合、屈辱感や恥に由来して使われているのが目を引く。

或いは大君の死後、弁と嘆き合う場面では次のような贈答がある。

さきにたつ涙の川に身を投げば人におくれぬ命ならまし

と、うちひそみ聞こゆ。「それもいと罪深かなることにこそ。彼岸（かのきし）に到ること、などか。さしもあるまじきことにてさへ、深き底に沈み過ぐさむもあいなし、すべて、なべてむなしく思ひとるべき世になむ」などのたまふ。

身を投げむ涙の川にしづみても恋しき瀬々に忘れしもせじ

（「早蕨」⑤－359）

弁は、大君に死に後れたことを悲しんでいる。もし涙の川に身を投げていたらこんな目に合わずにすんだのに、という事実に反する仮想である。一方薫は、身投げの無効を言い、涙の川に沈んだところで、亡き大君への愛執は捨てきれないと歌うのだ。ここには、薫の入水に対する価値判断が示されている。入水は罪深いことで、そんなことをしては浄土の岸に辿り着けない、地獄に沈むのもつまらぬことだと。入水という極端な仕方でなくても断っているから、自殺一般を仏罪とする考えであろう。

『源氏物語』が書かれた当時、人々は入水や投身をどう考えていたのか。我々は、入水往生という死に方を仏教説話で知っているが、そうした信仰はいつの頃から始まったのか。

『発心集』に採られている「或る女房、天王寺に参り海に入る事」（三ノ六）は、鳥羽院の時とあるから十二世紀前半であろう。四天王寺の西門から難波の海に漕ぎ出し、「西に向ひて念仏することしばしありて、海にづぶと落ち入りぬ」とある。いくつもの奇瑞が現われたので、人々はこの女房の往生を間違いなしとみた。こうした往生を願っての入水は、浄土教の盛行とともに行なわれるようになったとみえ、説話類にいくつもの例話を指摘できる。概ね、十二世紀以降のことである。

天王寺が極楽浄土に通じる門なら、熊野の那智は観音のいます補陀落（ふだらく）浄土に通じる門である。この海岸から南へ向かう渡海が、「深く決意された自殺行」であることは、早く益田勝実によって説かれている。[注2]『発心集』三ノ五「或る禅師、補陀落山に詣づる事」の末尾には「一条院の御時とか、賀東聖と云ひける人[注3]」の先例が書き添えられていて、補陀落渡りが十一世紀の初頭には既に行われていたらしいことが判る。そうは言っても、往生を願っての入水はまだ一般に知られるところではなく、

『源氏物語』の作者の視野にも入っていなかったと考えていいであろう。明石入道が最後の手紙に「小さき舟に乗りて西の方をさして漕ぎゆく」夢をみた（「若菜上」④－114）と書いているのは、観念としての西方浄土願望であって、実際には、山深く踏み入ったとある。

補陀落に渡った禅師が、始めは「身燈」を考えたとある点は注意される。我が身を焼いて仏に捧げる灯となる「身燈供養」のことである。手の皮を剥いで浄土図を描いた尼僧の話が『日本往生極楽記』（32「尼某申」）にあるから、十世紀末において、こうした布施行のあることは認識されていた。そして布施の中でも最上の「捨身供養」の話は、釈迦本生譚の形で、平安貴族にはなじみ深いものであった。自らの肉体を提供する施しについては、源為憲の『三宝絵』にも詳しく説かれている。保胤の『日本往生極楽記』が成った前年、九八四年に書かれたこの書は、若くして出家した尊子内親王の為の仏教入門書であるから、わかり易い。絵に添えた文章は仮名混じりであり、仏家の間だけでなく一般にも広く読まれたという。

そこに説かれている捨身供養の代表が、残りの偈を聞く為には我が身を鬼に食わせてもよしとする「施身聞偈」（上巻十「雪山童子」）と、飢えた虎の為に我が身を投げ出し血肉を与えようとする「捨身飼虎」（上巻十一「薩埵王子」）とである。真摯な求道と布施の心を伝えるこれらの説話は、『三宝絵』の絵は失われていても法隆寺玉虫厨子台座の画材となって今に伝わるので、鮮明にイメージできる。十世紀、十一世紀において、釈迦前生の「捨身」行は、人々の知るところであった。『拾遺和歌集』の次の歌なども、それを踏まえて詠まれている。

いにしへの虎のたぐひに身を投げばさかとばかりは問はむとぞ思（巻八、五〇八）

有とても幾世かは経る唐国の虎臥す野辺に身をも投げてん（巻十九、一二二七）

前者は、飢えた虎を救おうとした釈迦に倣って我が身を投げたら、無情な人も同情してくれるかも知れないという意であり、後者は、生きていても長らえそうもないから、いっそ外国の虎が臥すという野辺に我が身を投げようかという恋の歌なのだ。どちらも仏道からは遠く、相手への思いを釈迦の故事を借りて詠んでいる。

薫もまた大君を偲ぶ時、雪景色からの連想で、雪山童子の「施身聞偈」を持ち出すのだ。

恋ひわびて死ぬるくすりのゆかしきに雪の山にや跡を消なまし

半なる偈教へむ鬼もがな、ことつけて身も投げむと思すぞ、心きたなき聖心なりける。（「総角」⑤－333）

残り半分の偈を教えたという鬼が現われてくれたら、自分も身を投げようものをという未練である。語り手はひと言「心きたなき聖心」だと評している。求法の為ではなく執着から投身を口にすることも、雪山に入って姿を隠してしまおうかと歌う

ことも、所詮は口先だけとからかう如くである。

薫は出生の不審に悩んでいた少年の頃から、「善巧太子」の名をあげて、自ら出生の謎を尋ね知ったという知恵を私も身につけたいと言ったり（「匂宮」⑤－23）、八宮の娘たちに琴の演奏を所望する時、釈迦の弟子「聖だつ迦葉」だって音楽に乗って舞ったというではないか（「椎本」⑤－181）と、仏教故事に通じた人物として造型されている。その実、真の聖心ではないと匂宮に見透かされたり、語り手も指摘する手の込んだ書きぶりである。堅固な求道の象徴であった「捨身」は、次元の違うところで一般に流布し、薫にもそれを流用させているのだ。

浮舟失踪の後、事情を知らぬ乳母が、「鬼神も、あが君をばえ領じたてまつらじ。人のいみじく惜しむ人をば、帝釈も返したまふなり。」（「蜻蛉」⑥－206）と言うのも、雪山童子が身を投げるや鬼神が俄かに帝釈天に姿を変えて童子を受けとめたとある「施身半偈」の話に由来していよう。(4) 惜しまれる人は、帝釈天の加護で助けられるという考えである。作者は、仏教の捨身思想を充分熟知していた。その上で、生半可に準うことの罪にも思い及んでいた。

『三宝絵』は序において、一日でも一夜でも出家することの功徳を述べている。そこに、財力にまかせて布施したり「生ナマシキ身ヲ割（さき）テ人ニ与ヘムヲモ勝（すぐれたり）トシモ不説給（ときたまはず）。」という言葉がある。血肉を与える生身の施しも、出家の功徳にはかなわないというのだ。釈迦前生譚の項に「捨身」を説きながら、この深遠な行を凡夫が真似ることの愚も明言している。

僧尼令でも、「捨身」と「身燈」とは禁じられていた。

凡そ僧尼、身を焚き、身を捨つること得じ。若し違へらむ、及び所由の者は、並に律に依りて科断せよ。（『律令』巻第三－27）

布施のためであっても、身を焼き身を捨てることなど安易にすべきではない。こうした禁止令があるからには、実際に行われていたことが想像されるが、それらはおそらく中央の寺院教団から離れた世界でのことであろう。補陀落渡海の説話も、「寺院教団の信仰説話と種を異にしているらしい」[注4]と指摘されている。

浄土教の盛行とともに往生を願っての入水はいずれ流行することになるが、『源氏物語』執筆当時の「捨身」に関する意識は、以上のような状況とみることができる。

喜捨ではなく、自ら身を棄てる浮舟の造型は、どこから導き出されるのか。

三、「羊の歩み」近づく

宇治の姫君たちの生き難い人生、それを引き継ぐ最後の主人公浮舟に、入水という結末をつけるべく物語は進められるが、思えば大君の死も、意志的な「自死」に近いものであったことは確認しておく必要がある。

大君が、もはやこの世に身の置き所はなく出家も叶わぬと観念した時、「いかで亡くなりなむ」「いかで亡（う）せなむ」という語

が繰り返され、「物もつゆばかりまゐらず」（「総角」⑤－300）とあった。食を断つのだ。そして父八宮がたとえ地獄にあろうとも、「いづくにもいづくにもおはすらむ方に迎へたまひてよ」（⑤－311）と願う。極楽往生は眼中になく、ひたすら死を志向している。病気平癒のための修法も不要とするし、ちょっとした果物さえ口にしない。その結果としての「ものの枯れゆくやうにて消えはてたまひぬる」（⑤－328）衰弱死であった。親王の娘としての矜持を保った、願い通りの美しい最期が実現している。

一方浮舟は、同じ八宮の血を受けながらも、養父常陸介の世界で育ったことで、無垢な反貴族性が保証される。「人形」としての登場も、浮きたる舟という自己認識も、すべては入水を必然化すべく創られた装置である。

もっとも顕著な方法は、伝承の入水譚を援用することだ。当時の人々にとって、勝鹿の真間の手児名や生田川の菟原処女の入水は、馴染み深いものだった。そのほか『紫式部集』に記し留められている「あやしき歌語り」[注5]も注意される。かひ沼の池に身を投げた人の話らしい。作者は家で臥せっている時この話を耳にして興味を覚え、次のような入水の歌を作っている。

世に経るになどかひ沼のいけらじと思ひぞ沈むそこは知らねど（「紫式部集」88）

この世に生き長らえても何の甲斐があろう。もう生きてはいるまいと思い詰め、かひ沼の池に身を沈めることです、と伝承の世界に参画している。これは気のめいる歌なので、気分のよいのをもう一首と付け加えてもいる。かひ沼という地名の探索と、失われた歌語りの再建が、原田敦子氏によって試みられている[注6]。東北の地に違いない、鄙の女の入水というモチーフは、作者の創作意欲を刺激したことだろう。

浮舟の窮地は、二人の男の板挟みで川に身を投げた伝承の処女ほど素朴なものではない。薫に迎えとられる立場でありながら匂宮に魅かれる心に正直だったのだ。そのことに苦悩し、恋の絶頂に「われは消ぬべき」（「浮舟」⑥－155）と歌うのだ。そして母の不用意な言葉が、「わが身を失ひてばや」（⑥－167）という自殺願望を強める。大君の自己の追い詰め方は心内語でなされていたが、浮舟の場合は、周囲で交わされる会話によって追い込まれていく方法がとられる。更に決定的なのは、右近の語る東国の悲話である。これは昔話ではなく右近の姉の実話として提供され、常陸の国の二人の武士をめぐる三角関係である点、その殺傷事件に現実性がもたされている。兵の一人は死に、一人は追放され、罪深い女は東国に身を沈めた、と。浮舟は匂宮や薫に及ぶかも知れない危害と、生き恥とを拒否して、「まろはいかで死なばや」（⑥－181）と自裁を決意する。

昔は、懸想ずる人のありさまのいづれとなきに思ひわづらひてだにこそ、身を投ぐるためしもありけれ、ながらへばかならずうきこと見えぬべき身の、亡くならんは何か惜しかるべき、…（中略）…児めきおほどかに、たをたをと見ゆれど、気高う世のありさまをも知る方少なくて生ほした

てたる人にしあれば、すこしおずかるべきことを思ひ寄るなりけむかし。（⑥—184）

昔は懸想する男の優劣をつけられずに思い煩い、それだけで川に身を投げた例があるのだ。二人の男に通じた我身を棄ててしまうのに、何の惜しいことがあろう。おっとりと弱々しく見える浮舟が、こんな荒々しいことを思いついたのは、育った環境に拠るのだ。この理由説明は、貴族社会の常識への配慮であると同時に、創作上の種あかしでもある。古伝承の入水譚に共通しているのは、ギリギリの決定権が女の側にあったことだ。無垢な女が大胆な行動に走る、その核心が貴族の物語に移し植えられたと読むべきであろう。

自らの意志では行動しえない浮舟が、周囲との関係性において一歩一歩入水に近づく過程が外側から描かれ、心の逡巡は、独詠歌が受けもつようになってゆく。そして「身を棄つ」と詠みこむ歌はたゞ一首だけ、匂宮との贈答にある。厳戒下の宇治で、浮舟に会うこともできず帰京するしかない匂宮が、

いづくにか身をば棄てむと白雲のかからぬ山もなくなくぞ行く（⑥—192）

いったいどこに身を棄てたらいいのかと、詰るように言ってくる。これが浮舟に宛てた最後の歌となるのだが、和歌の「身を棄つ」は、相変らず定石通りの譬えの域を出ない。浮舟の方は、二度と逢えない別れと知りつつ追い返す切なさに、枕の浮くほどの涙にくれるしかない。

なげきわび身をば棄つとも亡き影にうき名涙さむことをこそ思へ（⑥—193）

匂宮の「身を棄つ」を承けているが、こちらは死の決意表明と受けとれる。それでもなお後に流される浮き名が情けないと、死後に思いを及ぼしている。もはやこの歌は、誰にも届かない独詠歌に属する。「浮舟」の巻にはこの後、辞世の歌が三首加わるが、入水に至る緊迫した事態は、和歌が受けもつ領域ではない。

夜になれば犬の遠吠えと、警固の夜廻りが弦打ちする音が聞える。宇治川の荒々しい水音には、女房たちが噂していた溺れ死んだ人の話が甦る。暗闇の中、まんじりともせずに家を脱出する手だてを思案する。川音には、祓えの具である「人形」を流すイメージも引き寄せられる[注7]。すべては重層的に重ねられ、構築されていく。歌物語との大いなる相違である。

匂宮を思い、親を思い、眠れぬ夜を過した夜明けの薄明の中、川を見やる浮舟に、死はそこまで迫っていた。

明けたてば、川の方を見やりつつ、羊の歩みよりもほどなき心地す。（⑥—193）

屠所に引かれる羊よりも死は間近い、との譬えである。獄卒に追い立てられるように、羊は屠殺場へ歩を進め、囚人は一歩

一歩処刑場に赴く。これが作者の、経文から持ち込んだ浮舟最期のイメージなのだ。『大般涅槃経』の迦葉菩薩品に、「死想を修す」と題して、死は山の鉄砲水のように、また朝露が久しく停まらないようにやってくる、という文脈に続けて、

囚(とらはれ)の市に趣き歩歩死に近づくが如く、
牛羊を牽ゐて屠所に詣(いた)るが如し[注8]

とある。命尽きることを、駆り立てられた囚われ人や羊牛の歩みで言っている。

同様の語句が、『往生要集』では「無常」の例に引かれている。「梅陀羅(せんだら)の牛を駈りて屠所に至るに歩々死地に近づくが如し[注9]」と。梅陀羅とは、牢獄の監守や屠殺者のことだという。また赤染衛門も「けふもまた午の貝こそ吹きつなれひつじの歩み近づきぬらん[注10]」と詠んでいるから、当時「羊の歩み」は人生のはかなさを表わす語として使われるのが一般的だったとみえる。しかし死地に赴く浮舟には、羊の歩みに囚人の一歩一歩も重ねられていると読むべきではないのか。弱き者、罪深き者の最後の姿である。浮舟の入水は、愛執の罪を負う者の自己断罪であるがゆえに、その潔さが人々の胸を打つのだ。

山寺の誦経の鐘の音が風に乗って聞えてくる。その鐘に死出の門出を促されたかのように、浮舟は姿を消す。それ以上は何もなく、「浮舟」の巻は幕を下ろされる。自裁の光景などいらない。あとは「蜻蛉」の巻以降で検証される方法がとられる。

『大和物語』の菟原処女は「つぶりとおち入りぬ」(一四七段)とあったし、采女も「夜みそかにいでて、猿沢の池に身を投げてけり」(一五〇段)と描写されていた。歌物語は、投身の事実を言い置かずにはすまない。後に成立する『狭衣物語』などでは、飛鳥井姫が虫明の瀬戸に身を投げる時、髪の毛を始末し海を覗いて恐ろしさに身をすくめる所作まで細かく描写されている(巻一)。暗示し、積み重ねたすべてをもって象徴する「浮舟」の巻の表現は際立っている。

あるいは、指摘されていること[注11]ではあるが、歌におけるような美化がなされていない点も挙げられる。人麻呂や高橋虫麻呂は、水死した女にうち靡く玉藻を重ねて黒髪のイメージで回想している(『万葉集』四三〇、四三三、一八〇七、四二一一など)し、猿沢の采女も、その「ねくたれ髪」を池の藻と思って見るのは悲しいと歌われていた。浮舟の失踪は、周りの者の狼狽と遺骸のない葬送といった顛末として描かれるばかりだ。

乳母が、帝釈天に浮舟を返してほしいと願ったことは先きに触れた。右近と侍従は宇治川への入水を確信している。それにしても頼りない姫君が、「心強き」覚悟を決めていたなど思いもよらなかったとも言っている(⑥—228)。

浮舟入水という想像を超えた行為に対して、やはり説明を加える必要があると、作者は後から感じたのだろう。余白で補っていた読者は、「手習」の巻に入って二つの側面からの「真相」を聞かされることになる。一つは、最後のひと押しをしたのは八宮邸に紛れこんだ法師の物の怪で、調伏されて口走る言葉「いと暗き夜、独りものしたまひしをとりてしなり」(⑥—295)というものだ。もう一つは、蘇った浮舟自身がたぐり寄せた朧

ろな記憶である。家を出た時、風は激しく川波も荒かった。「この世に亡せなん」とのみ思いつめた憔悴の極みで、「いときよげなる男」に抱きとられたのは幻覚だったのか。その瞬間、正気を失った（⑥－296）と。この念のいった補足説明は何を意味するのか。それだけ浮舟の入水が、一般には受け入れ難い、常軌を逸した行為だったことの証左であろう。入水の必然性に細心の配慮をしてきた作者は、投身そのものは黙して語らず、後から加える回想の自由さをもって現実化を図っているのだ。

更に、横川僧都の加持によって駆り出された物の怪が、成仏できぬ法師だったとされたことも気にかかる。俗体ながら聖として生きた八宮も往生できていなかったと、後に中君や阿闍梨の見た夢などで語られていた。浄土信仰の勃興期であるが、宇治十帖には極楽往生のたやすくないことが、繰り返し述べられている。慶滋保胤は『日本往生極楽記』の序文において、「後にこの記を見る者、疑惑を生ずることなかれ。」と述べてから、往生者の実例を列挙している。しかし『源氏物語』の作者は、懐疑的だったに違いない。たとえ出家しても、来迎の雲に乗る間際に心が迷いそうだと、『紫式部日記』に書いているではないか。

蘇生した浮舟の出家は、残された唯一の生き方として選びとられた。それは現世をどう生きるかの問題であって、死後の往生が問われているのではない。その境地は、薫を置いてきぼりにした終幕として鮮やかだが、はたして浮舟は「救済」されるのか。物語は、答えを出さぬまま終る。「浮舟」の巻に、『源氏物語』最後の頂点をみる所以である。

※引用本文（ページ数）は、小学館　新編日本古典文学全集『源氏物語』①～⑥による。また勅撰和歌および『三宝絵』は、岩波　新日本古典文学大系の表記によった。

注1　駒尺喜美『紫式部のメッセージ』（朝日選書）

注2　「フダラク渡りの人々」（一九六二年）『火山列島の思想』（筑摩書房）所収。

注3　この聖が「賀登聖」なら、土佐の足摺岬から漕ぎ出したのは、長保二（一〇〇〇）年八月十八日のことだという。（新潮日本古典集成『方丈記　発心集』頭注）

注4　ここの出典に、小学館の新編日本古典文学全集（付録　仏典引用一覧）は、「岷江入楚」の説と『三宝絵』上巻、十三「施无」の話をあげているが、それでは鬼神の説明がつかない。

注5　益田勝実「歌語りの世界」（『季刊国文』四号、一九五三年三月）貴族社会の口承文芸「歌語り」を提唱された、その論拠ともなる話である。

注6　「紫式部集『かひ沼の池の歌語り』試論」（『古代伝承と王朝文学』一九九八年和泉書院）

注7　浮舟は人々の罪を背負って水に流される「贖罪の女君」であるとの見解が、林田孝和によって出されている。（『源氏物語の発想』一九八〇年桜楓社）

注8　「大般涅槃経」巻三十四、迦葉菩薩品の四（『国訳大蔵経』第九巻）

注9　『往生要集』巻上、第五「人道」、出典は「摩耶経の偈に云く」とある。（日本思想大系『源信』）

注10　『千載和歌集』巻十八　誹諧歌一二〇〇。ただし「大弐高遠集」にも同文の歌が載る（三八四）。

注11　鈴木日出男「浮舟物語試論」（『文学』一九七六年三月）に詳しい。

（あまの　きよこ・文学部教授）